

れて引返したりとおもへるは、其人を知ざる詞なり、徳川殿諸將をひきゐ、先上方に攻上り、石田を討れんに、十に八九石田敗北すべし、其時殿一人にて、いかで徳川殿に打勝給ふべき、敵國に攻入ずして引返したるは、味方の不幸なりとぞ云ける。

〔藩翰譜相馬〕景勝○上が兵起りし時、伊達左京大夫政宗は、急ぎ本國に歸りて、搦手より攻め入るべき由の仰承て、大坂を打立ち、夜を日に繼て馳せ下る、白川より白石に至ては、皆敵の中なれば、

道塞りぬ、常陸國を廻りて、岩城相馬にさし懸て國に歸らんとするに、相馬又累代の敵國なり、恙なく通らんこと叶ふべからず、然るに政宗纔かに五十騎計引具して、常陸の國を經て、岩城と相馬との境なる處に至て、先づ相馬が許に使者を立て、○中願はくは城下に旅館點して給はらんには、馬の足を休めて、明日は國に入らんと存すと云はせたり、長門守義胤○相是を聞て、○中頼

て民家をしつらうて迎ひ入れ、家子郎從等召し集めて、夜討のやうをぞ議したりける、爰に水谷三郎兵衛尉某遙の末座より進み出て、末座の意見恐れ入て候へども、既に僉議の座に列て候ふ上は、心に存する所を申さばらんは、其詮なし、抑も窮鳥懷に入る時は、獵者もこれを殺さずとこそ承はれ、政宗ほどの大名が既に年來の恨を棄て、君を頼みて來りしを、たばかりで聞々と討たれんば、勇者の本意とする所にあらず、長き弓矢の瑕瑾なり、又我が城を去て、彼國の境駒が峯に到らんこと、行程僅に三里、けふの日未だ未の時に下らず、政宗おのが境に到らんとだに思はゞ、日ゆふべならざる間に到りぬべし、それに僅の勢を以て此所に止ること、豈深き謀計なからざらん、只同じくは我備を全うして、彼に代つて夜を守り、先づ此度は本國に返し給ひ、重て戰に臨まん時、尋常に軍して、勝負を兩家の天運に任せらるべうもや候はんと申ければ、満座の輩、皆此議に同じて、彼が旅館の邊に、糧料、魚、鹽、秣、糠、藁に至るまで積み置て、夜に入り四面に箭火たかせ、兵共に館をめぐらせ、警衛心を盡してけり、